



禁煙ジャーナル

■発行人 一般社団法人 タバコ問題情報センター [代表理事・渡辺文学]

No. 352

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 2-1-4 九段セントラルビル 203

TEL: 03-3222-6781 FAX: 03-3222-6780

《郵便振替》00120-0-159803 【印刷】遠藤印刷 1部500円

朗報！全国に急拡大した イエローグリーンキャンペーン ～禁煙デー、フォーラム開催も～

長崎県佐世保市民のアイデアで2003年から始まった「イエローグリーンリボン運動」は、その後京都、福山など関西地方に拡散。そして、2020年には福島県の齊藤道也医師が中心となって同県の医師会や医学団体、民間企業などを巻き込み初の全県的な運動を実施、大きな成果を挙げました。齊藤氏はこうした運動を全国で行う必要性を日本禁煙学会や日本医師会などにも働きかけていましたが、今年の「禁煙週間」には19の府県が呼応。キャンペーンを大々的に実施、リボンの配布、建物や施設のライトアップ、さらにはイベントも開催されました。

今回は取り組みの中心的役割を担われた方々に、それぞれの地方での状況や課題について報告を頂きました。厚く御礼申し上げます。(編集長・渡辺文学)

「大切な人を守りたい」を合言葉に

福島県医師会 タバコ問題対策委員長
齊藤 道也



『イエローグリーン、それは愛する大切な人をタバコの煙から守りたい、あなたの心の色』これを合言葉に今イエローグリーンキャンペーンは全国に広がっています。

佐世保市での市民運動として初めてスタートしたアウェアネスカラーの一つであるイエローグリーンリボン活動は、その後京都、福山など関西を中心にしっかりと継続されてきました。

■学術総会を機にタバコ対策急展開

2020年の新型コロナウイルス感染症のパンデミック禍の始まりの年に日本禁煙学会総会(大会長:佐藤武寿:現福島県医師会会長)が対面とWEBを用いた初めてのハイブリッド開催として福島県郡山市で開催されたことを契機に、福島県医師会がタバコ対策に本腰を入れた結果、医師会内にタバコ関連問

題対策委員会が立ち上げられ「一般社団法人 Tobacco-freeふくしま」と「日本禁煙学会福島支部」が設立され、福島県保健福祉部との協働が進み、三次喫煙まで踏み込んだ受動喫煙防止条例制定とともに、全県各所でのライトアップ、福島県タクシー協会加盟2500台がイエローグリーンリボンを貼って走行し、サッカーJリーグをはじめ、バスケットボール、野球など、プロスポーツ団体も一緒となったポスター作成や、スペシャルマッチ開催等他県に類を見ない活動が今年3年目を迎え、さらに熱く繰り広げられてきたのはご承知の通りです。

しかし福島県の原因別死亡割合の50%以上はがんであり、心疾患、脳血管疾患といったタバコ関連疾病の死亡率は全国でも上位となっていることから、キャンペーンの拡充は福島県の健康指標への好影響、数値改善が強く期待されているのも事実です。

■広がったライトアップ

そしてこの3月、受動喫煙対策としての「イエローグリーンキャンペーン」が日本医師会から全国各都道府県医師会に発信と協力要請がなされ、また並行する形で日本禁煙学会も世界禁煙デーに向けてHP上で強力な発信協働が始まりました。

＊—1頁からの続き—

イエローグリーンライトアップは、全国各地で公的機関や医療機関、企業、公共施設が参加し、その地域にマッチした形で盛り上がりを見せ、テレビ、新聞報道でも数多く取り上げられました。

それぞれのライトアップは、工夫によって電力消費も抑えられ、設置費用も決して高いものばかりではありません。

全国各地の私共が把握している活動をご紹介します。ここでは紹介しきれない個人の活動がたくさんあるのも事実ですが、私共で知らない紹介すべき地域活動がございましたら、取りまとめしている禁煙学会事務局までご連絡いただくと幸甚です。

毎年世界禁煙デーの時期が一番盛り上がりますが、この活動は通年活動です。今後とも変わらぬ協働、さらなるライトアップ施設の拡充に努めてまいりましょう。

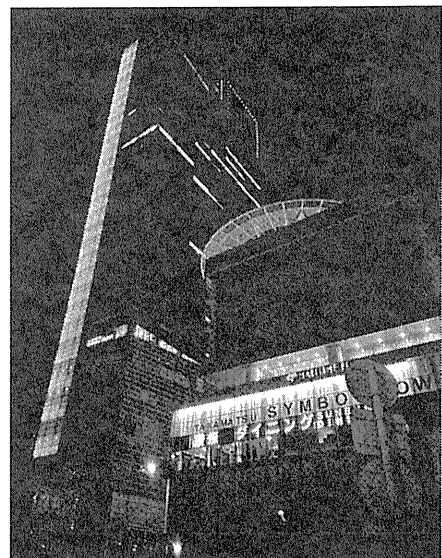
【さいとう・みちや=日本禁煙学会理事/いわき市医師会副会長/Tobacco-freeふくしま代表】



【キャンペーン実施各地の状況】

- 青森県・青森市：ライトアップ/青森県観光物産館アスパム
- 宮城県・仙台市：ライトアップ/宮城県医師会館、仙台市医師会館、急患センター、仙台放送TV塔、仙台市医師会看護専門学校、宮城県・涌谷町：涌谷城、白石市：白石城、角田市：H-IIロケット（模型）
- 秋田県・秋田市：ライトアップ/ポートタワーセリオン
- 山形県・山形市、天童市、寒河江市、新庄市、南陽市、長井市、米沢市、複数キャンペーン、山形県医師会館ほか県内多数施設でのライトアップ、イベント開催
- 福島県・福島市、本宮市、須賀川市、白河市、いわき市、会津若松市、南相馬市、郡山市、複数キャンペーン、福島県医師会館ほか県内多数施設でのライトアップ、イベント開催、街頭キャンペーン、プロスポーツスペシャルマッチ開催
- 茨城県・水戸市：ライトアップ/茨城県メディカルセンター
- 埼玉県・行田市：ライトアップ/忍城
- 愛知県・名古屋市：ライトアップ/名古屋市医師会守山区休日夜間診療所
- 滋賀県・彦根市：ライトアップ/彦根城
- 京都府・京都市：ライトアップ/京都府庁、京都府役所、京都府医師会館と関連イベント開催、タバコクイズ

- 兵庫県・神戸市：ライトアップ/兵庫県医師会館
- 愛媛県・愛媛市：ライトアップ/愛媛県医師会館、愛媛県庁、赤金ミュージアム、新居浜市：新居浜市医師会館
- 広島県・福山市：リボン運動/東広島市：ライトアップ/東広島市立美術館
- 香川県・高松市：ライトアップ/高松シンボルタワー
- 高知県・高知市：ライトアップ/高知城、高知県医師会館、総合あんしんセンター
- 山口県・山口市：ライトアップ/山口県総合保健会館
- 佐賀県・佐賀市：ライトアップ/佐賀メディカルセンター
- 長崎県・佐世保市：リボン運動
- 熊本県・熊本市：ライトアップ/熊本城、済生会熊本病院、熊本大学病院と関連イベント開催



●高松シンボルタワーのライトアップ



●ライトアップされた熊本城

森田氏と橋本氏からはライトアップされたカラー写真をお送り願いましたが、残念ながら小紙はモノクロですので、ライトアップの素晴らしい写真をお見せすることが出来ません。深くお詫びします。

2023 世界禁煙デー 「香川フォーラム」を開催して

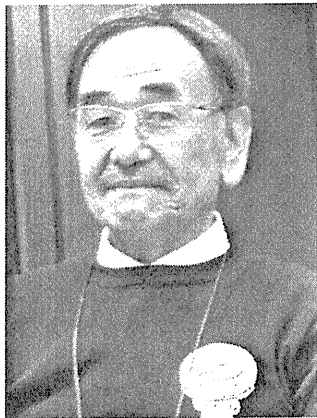
香川タバコの害から健康を守る会
森田 純二

新型コロナ感染症の影響で3年間対面での活動が出来ませんでした。規制緩和が広がりを見せる中、今年久しぶりに対面での会を開きました。

また同時に日本各地で禁煙や受動喫煙防止のシンボルカラーとなったイエローグリーンライトアップも広がりを見せていますが、高松市でも高松駅近くのシンボルタワーを、フォーラム開催に合わせて5月28日から10日間、美しいライトアップを行いました。

今年は全国各地でイエローグリーンライトアップが施行され、今後はますます広がるものと期待しています。皆さんもイエローグリーンが禁煙や受動喫煙防止の意味を持っていることを知り頂き、多くの人に拡散して頂きたいものです。

会に際して大西秀人高松市長には来賓のあいさつをお願いしていたのですが、主催が香川県も入っていたため、県関係者にどなたかのあいさつをお願いしたところ、昨年就任した池田豊人新知事が出席することとなりました。



さらに香川県医師会長も出席となり、予想以上に豪華な顔ぶれになり少し慌てましたが、何とか参加者が100名を越してホッとしました。

■職場・職域の喫煙対策に重点

今回のテーマは「未来に向けてタバコ問題を考える」としましたが、職場や職域における喫煙対策です。各職場で、できれば各々が持続可能な喫煙対策を立ててほしいと願って企画しました。

このテーマに合わせて基調講演はサイエンスライターで今や講演に忙しい石田雅彦氏に登壇いただき「職場における喫煙対策～SDGsとタバコ規制」という講演を熱く語っていただきました。

続いてのシンポジウムは「職場におけるこれからの喫煙対策のあり方」をテーマに、KKR高松病院の荒川裕佳子先生と私がコーディネーターとなって、地元で喫煙対策を担当している保健師や企業の担当者7名によるそれぞれの工夫を話していただきました。

内容は私の予想をはるかに上回るもので、感動しました。各企業で禁煙支援をしているスタッフが何を工夫して実践しているかがよくわかる内容でした。今回の内容はどちらの企業でも十分参考になるものと考え、YouTubeにアップしています。

フォーラム終了後、高松市ゼロカーボン推進アドバイザーの森田桂治氏の指導のもと、約30名で3班に分かれて高松駅周辺で吸い殻拾いも行いました。その後美しいライトアップの点灯を楽しみ長い一日を終えました。

【もりた・じゅんじ＝香川県予防医学協会顧問】

* You Tube のアドレスは以下の通りです。

<https://youtu.be/8-kIw6W5Wvk>



【写真】フォーラムと吸い殻拾いが終わった後、主なスタッフが集まり撮った記念写真。
手に持っているのは拾い集めた吸い殻です。

2023年世界禁煙デー 熊本城のライトアップ

くまもと禁煙推進フォーラム
代表理事 橋本洋一郎

■熊本城などでライトアップ



喫煙はがん、脳卒中を含む心血管疾患、認知症などさまざまな疾患の危険因子となることから世界保健機関(WHO)や厚生労働省は「世界禁煙デー」(5月31日)と「禁煙週間」(5月31日～6月6日)を定めて、啓発活動を毎年行っています。

熊本では、2022年は熊本大学病院(時計塔・プロムナード)のライトアップのみでしたが、今年は熊本城、熊本大学病院、済生会熊本病院でライトアップがおこなわれました。

さらに一般社団法人くまもと禁煙推進フォーラムの理事の施設であるたかの呼吸器科内科クリニック、熊本ドライビングスクール(地元のテレビでも紹介)と菊池自動車学校でもライトアップがされました。

6月3日に地元紙である熊本日日新聞のweb siteでライトアップされた熊本城の写真とともに県内5箇所でも取組があったことを伝えてくれました。

■世界禁煙デーでの関連事業

5月31日18時に熊本城の前の熊本市役所14階の「ダイニングカフェ彩」でくまもと禁煙推進フォーラムのメンバーで食事会をして、日没前の明るいライトアップされていない熊本城と日没後のライトアップされた熊本城を見ながら食事と歓談をしました。(写真参照)

食事会終了後にイエローグリーン(YG)キャンペーンの缶バッジ(独自で作成)を持って、1時間かけて熊本城を皆で回って、ライトアップされた熊本城を見ている方々に缶バッジを配布して世界禁煙デーを知ってもらおうとしましたが、雨が降り出して断念しました。写真撮影のみとなりました。

5月28日はWEBで第27回くまもと禁煙治療セミナーを「新型タバコとSDGs」をテーマに開催し、全国から100名の方に参加頂きました。

■世界禁煙デーとYGキャンペーン

佐世保市民のアイデアで2003年にアウェアネスリボン運動としてスタートとしたことに始まります。YGリボンは黄緑色のリボンで、受動喫煙防止を推進し健康を守りたいという気持ち「たばこの煙を吸いたくない」という気持ちを周りの人に伝えるためのものです。

疾患啓発のためのライトアップは電力の無駄遣いと批判もされますが、普段、無色でライトアップされている施設に色を付けるだけです。電力消費が増えることはありません。

■様々なライトアップが

熊本県では2月22日の頭痛の日(グリーン)、3月26日のパープルデー(紫色、てんかん啓発)、5月31日の世界禁煙デー(イエローグリーン)、10月29日の世界脳卒中デー(インジゴブルー)に熊本城とともに医療機関を中心に啓発のライトアップが行われました。

熊本県はタバコ対策が遅れており、熊本県民が愛する熊本城でライトアップによる疾患啓発ができるので大変ありがたく思っています。

お金をかけない疾患啓発はSDGsの理念にも一致します。

2024年にもっと多くの場所でライトアップによる禁煙啓発ができればと願っています。

【はしもと・よういちろう=済生会熊本病院 脳卒中センター(脳神経内科) 特別顧問】



禁煙推進活動における連携と協働 山形県医師会最優秀賞と イエローグリーンキャンペーン

NPO法人山形県喫煙問題研究会
副会長 川合 厚子



「第1回山形県医師会奨励賞」で最優秀賞をいただきました。とても光栄でありがたいことと思います。

皆様ご存じのように禁煙推進活動は一人ではできません。多くの方や機関とのつながりが

あってこそこのこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

禁煙推進活動を行っているると連携と協働の重要性を切に感じます。自分たちだけで頑張るのではなく周りを巻き込んで賛同者を得てこそ禁煙推進への大きな流れが得られます。そのために図1のような連携と協働を考え、これを小論文にまとめたところ、過分の評価をいただき、上記の賞を受賞することができました。

■強い刺激受けた福島の取り組み

ちょうど斉藤道也先生がリーダーシップをとっておられる福島県のイエローグリーンキャンペーン（以後YGキャンペーン）に強い刺激を受け、山形県でもやろうとしていた時期でした。

山形県には山形県医師会、同歯科医師会、同薬剤師会、同看護協会からの委員で構成される山形県四師会禁煙推進委員会があります。

この会は各種禁煙推進イベントや喫煙防止教育出前講座等していましたが、新型コロナウイルス

感染症のために十分活動できない状態でした。この会でYGキャンペーンについて諮ったところ「やろう！」ということになり、ワーキンググループも作り一気に活動が盛り上がりました。

■県と市の協力も得て

山形県の阿彦忠之医療統括官からは県内他団体のグリーンライトアップや広報等教示いただき、県との共催にもつながりました。

また、2022年度四師会事務局担当の薬剤師会のはからいで山形市長にもYGキャンペーンのプレゼンテーションをさせていただき、共催とライトアップの協力を得ることができました。

山形大学医学部や附属学校での喫煙防止教育、山形県保健医療大学学生への啓発にもYGキャンペーンを活用しました。

私が産業医をしている自治体や企業でも工夫を凝らしたライトアップやリボンの手作り、コーナーづくり等がなされました。医師会をはじめとした医療機関、検診センター等でもライトアップに協力いただいたのは申すまでもありません。

■メディアの協力も得て

広報にはテレビやラジオ、新聞などメディアの協力も頂きました。初年度の取り組みとしては大成功だったと思います。

※（詳細は「イエローグリーンキャンペーンやまがた」で検索ください）

このようにYGキャンペーンは受け入れられやすく、人目を惹き、つながりを作るのに適した活動です。企業のCSRやSDGs、学生のボランティア活動としても効果的です。

現在は図2を目指して活動しています。全国の皆様、禁煙推進活動の連携と協働にYGキャンペーンの活用、お勧めします。

【かわい・あつこ＝公德会トータルヘルスクリニック院長】

図1

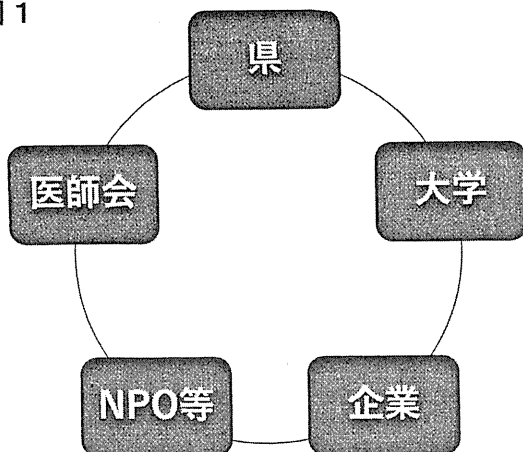
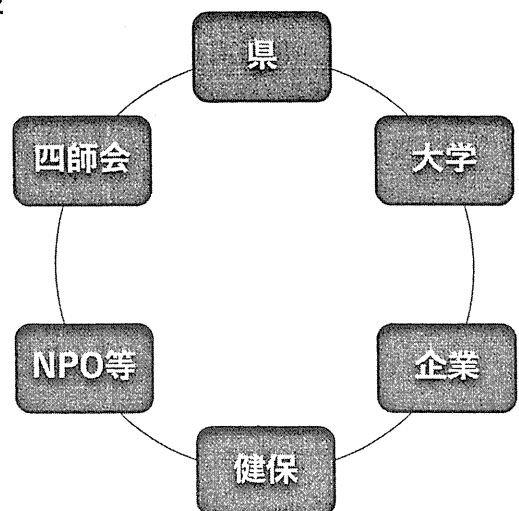


図2



世界禁煙デー秋田フォーラム開く テーマは「禁煙と家計見直し」

秋田・たばこ問題を考える会代表
鈴木 裕之



●マナークイズの回答をする参加者

今までは「禁煙によりタバコ代が浮きますよ」という訴えに留まっていたものが、浮いたお金をさらに積極的に活用できる方法があると知り、喫煙者だけでなく非喫煙者にも役立つ知識だった。斎藤氏の熱気のこもったプロ意識を感じる講演が素晴らしかった。

■好評だった「マナークイズ」

後半は「タバコマナークイズ」を出題した。問題を秋田・たばこ問題を考える会例会で関係者全員から募集し、科学的な根拠を検討した上で、全員の投票から10問を厳選した。例えば
[クイズ9] タバコを1日1箱吸うと1年間でニコレンドスイッチが何台買えるでしょう。

A. 約 3台/B. 約 6台/C. 約 9台

* (答えは最下段にあり)

参加者にはA、B、Cの紙で回答してもらい、自己採点をしてもらった。クイズの答えと解説は秋田・たばこ問題を考える会会員が1問ずつ交代で担当した。

進行役・解説者とも真剣さが伝わるプレゼンテーションではあったが、時折、各人が見せるユーモア混じりの工夫がとても印象的だった。

イベント終了後のアンケートではタバコマナークイズを「とてもよかった」と評価した方が76%、難易度を「ちょうどよかった」と評価した人が同じく76%であったので、かなりの高評価を得たものと考えている。

最後に協会けんぽ秋田支部長 加藤尊氏から閉会の挨拶として協会けんぽ秋田支部における受動喫煙防止対策などの話しをいただきフォーラムは閉会した。今回は62名の参加者だった。

【すずき・ひろゆき＝秋田県医師会タバコ対策委員会委員長／日本禁煙学会評議員】

フォーラムの全容はYouTube

(<https://www.youtube.com/watch?v=7uRCI3g0PL4&t=1s>) で配信中／(クイズの答え：B 約6台)



●みんな笑顔でフォーラム終了後の記念写真



6月3日「世界禁煙デー秋田フォーラム2023」を秋田市のカレッジプラザ講堂で開催した。

このフォーラムの初回は秋田・たばこ問題を考える会がWHOの「第1回世界禁煙デー」に合わせて1989年に開催され、その後は毎年開催、今年は34回目になる。

* (2020年は新型コロナウイルスのため中止)

現在では秋田県から県医師会への委託事業となっており、秋田県、秋田県医師会タバコ対策委員会、協会けんぽ秋田支部、秋田・たばこ問題を考える会が主催し、計画立案と運営を行っている。

秋田市医師会、秋田県歯科医師会、秋田県薬剤師会、秋田県看護協会、秋田県総合保健事業団、秋田県保険者協議会、秋田市、秋田県教育委員会の後援を得ている。

今年のテーマを「禁煙で人生お得に」に設定し、以下のプログラムを組んだ。

- ・司会：高橋香氏 (たいよう薬局)
- ・開会挨拶：秋田県健康福祉部長 伊藤香葉氏
- ・基調講演：「禁煙と家計見直し」

(株)トータルライフサポート代表取締役
齋藤廣勝氏

- ・「タバコマナークイズ」：進行＝石原英一氏 (ほの花調剤薬局いずみ店)
- ・クイズ解説：秋田・たばこ問題を考える会会員
- ・閉会挨拶：協会けんぽ秋田支部長・加藤尊氏

秋田県健康福祉部長・伊藤香葉氏からの開会の挨拶では、秋田県の喫煙状況(喫煙率全国ワースト7位)、がん死亡率(全国ワースト1位)の現状から、今後も受動喫煙を含めた厳しい喫煙対策が必要とのことであった。

■禁煙するとこんなにお得

基調講演「禁煙と家計見直し」では株式会社トータルライフサポート代表取締役 齋藤廣勝氏が経済的な面からタバコの害を紹介した。

例えば、1日20本のタバコを10年間吸うと総支出は216万円になること、禁煙すると収入補償保険・がん保険の保険料が安くなり、年間15,300円の節約になること、それを積立NISAで20年運用すると約505,910円にもなるということ、また、iDeCoで増やすと節税効果も得られること、さらにはふるさと納税による活用方法も示された。

第19回北海道禁煙フォーラム開く

日本禁煙推進医師歯科医師連盟北海道支部
廣田 洋子

「禁煙週間」の6月2日、札幌で「きれいな空気はみんなのもの～タバコの煙のない北海道を目指そう！」をテーマに、禁煙フォーラムが開催された。このフォーラムは「タバコの煙のないきれいな環境づくり」を目指し、道民や医療従事者を対象に、タバコに関する正しい知識を提供し、道民が一体となって禁煙推進活動を行っていくことを目的としている。

このため、北海道医師会、日本禁煙学会北海道支部、日本禁煙推進医師歯科医師連盟北海道支部が共催で行っており、こうしたイベントを医師会と禁煙推進団体が共催で行い、継続することにも大きな意義がある。

今年19回目を迎えたが、コロナ感染拡大防止のため2020年は中止、2021年、2022年はWeb開催してきたものが、4年ぶりに会場（札幌学院大学新札幌キャンパス）を設けてのハイブリッド開催となった。会場の参加者は27名だったが、YouTube配信の視聴者は1週間で315人となった。

フォーラムでは、特別講演1として、日本禁煙学会北海道支部松崎道幸氏による「受動喫煙：最新的话题～特に加熱式タバコ、電子タバコについて」がまず行われた。松崎氏には最新的话题を提供していただいたが、特に加熱式タバコの健康影響と「タバコ離れ」を何とか食い止めようとするタバコ会社の陰謀が明らかになった。

特別講演2は、札幌学院大学教授北田雅子氏による「ちょっと頑張る皆さんのための禁煙UP to DATE」で、動機づけ面接の手法を使った禁煙支援をわかりやすく解説していただいた。

現在、禁煙補助薬の供給不足から禁煙外来が窮地に陥る中、原点に戻って「禁煙支援」を行うことの重要性を実感した聴衆が多かったと思う。

最後に情報提供として行政（北海道保健福祉部地域保健課）から「北海道のタバコ対策について」現状の説明を受けた。受動喫煙防止条例や健康増進法の改正を受け、北海道は公共施設などの受動喫煙の実態を把握し、受動喫煙をなくす立場にあることから、強力な支援をお願いしたい。

なお、フォーラムの中で「令和5年禁煙ポスター募集入選作品」の紹介もビデオで行われた。

これは禁煙推進団体からなる北海道禁煙週間実行委員会が30年以上前から道内の小中高校（および一般）に呼び掛けて禁煙ポスターを募集しているもの。実行委員会による審査で、最優秀作品を次年度の北海道の禁煙週間のポスターに採用している。この活動は次世代を担う子ども達に対する防煙教育の一環としても意義がある。

【ひろた・ようこ】

タバコの吸い殻で魚が死亡

～京都の水族館で鯉や金魚が受難～

京都市にある「花園教会水族館」が6月27日、屋外の水槽で展示していた魚が立て続けに死んでいたことを公表し、水槽からタバコの吸い殻が出てきたことを明かした。

花園教会水族館は「許せない!! タバコの吸い殻で野外水槽の魚がほぼ死に絶え、子どもの憩いの場が奪われた。当館の水槽の鯉や金魚が立て続けて死んだので原因を調べたところ、タバコの吸い殻が出てきた」と怒りのコメントを掲載した。

「ニコチンは殺虫剤に使われる程毒性が強い。

1本で野外水槽全滅」と注意を喚起し「当面、野外水槽展示は中止させていただきます」と伝えた。

その後「生き残った魚達を別の水槽に移す作業を行っていますが、どの子も元気がなく、生きられるかどうかは微妙なところ」「カメの水槽も展示を中止します。毎日子ども達が挨拶するのが日課になっていましたし、本当に心苦しいです」と、胸中をつづっている。

28日の投稿によると「水槽の生き物たちが死に始めたのがこの1・2週間ほど」であり、最初にコイが死んでしまったのをきっかけに水の入れ替え、ろ過装置を入れ替えて、酸素供給量やPH計を見ながら経過を観察した。だが「元気に泳いでいた魚たちが水底で動かなくなり、死んでいきました」という。

投稿では「元気に泳ぎ回っていた魚たちが、なぜか端っこに固まってジッとしている姿を目撃、何か原因があるのでは？と水槽の底を調べたところ1本のタバコの吸い殻を発見」と状況を明かし「原因が吸い殻によるものである可能性を考慮して、生き延びている魚に対して、タバコの毒成分が付着している可能性を考慮し、真水でしっかりと魚を洗って、別の水槽に移した。暫くするとしっかりと泳ぐようになり、体調の改善が見られた」と説明。「タバコの吸い殻の水槽内への投下で魚に影響を与えた可能性が高いと結論付け」、投稿に至った経緯を明かした。

今後の展示については「12年続いた野外水槽ですが、生き物の命が危険に晒される可能性がある以上、これを機に撤去することにした」と判断したという。「今後、他の場所で同じようなことがないように祈りつつ、ツイートを残したい。このような結論になったことをお詫びすると同時に、ご理解の程お願いします」とつづっている。

一連の投稿に対しては「喫煙者全員が悪いわけではないけど、マナーの悪すぎる人の方が多すぎる」といった声が寄せられている。

【Yahooニュース 2023.6.28】

“どうする家康”

御成街道ゴミ狩り駅伝報告

タバコ問題を考える会・千葉 顧問
中久木一乗



千葉県東金市の梅室政司氏は、20年以上前から東金市内と九十九里海岸を中心に清掃活動を行っていた。

約10年前のこと、徳川家康の「鷹狩り」のために、佐倉城主・土井利勝が1614年に造った御成街道(船橋御殿～東金御殿)が開通400年を迎えた(学術的には諸説ある)と聞き「御成街道」を駅伝マラソンの様につないで清掃活動を行うことを考えた。

た(学術的には諸説ある)と聞き「御成街道」を駅伝マラソンの様につないで清掃活動を行うことを考えた。

■御成街道はゴミだらけ

「ゴミ拾い駅伝」主催者であるNPO法人「もう一つのプロジェクト」の市川真也氏の協力を得て、2013年「御成街道ゴミ狩り駅伝」の会がスタートした(読売新聞:2012.12.25.)。

元来の御成街道は約37kmで、一部分が現存する。その現存の道を主にして、県道・市道などをつないでマラソンの距離に合わせ全長42kmを設定した。

また、最初は襷リレーも取り入れたが、広報効果と交通事故防止の観点から参加者全員が襷がけで活動した。沿線各市の市役所・教育委員会に後援依頼し、集めたゴミの回収処理をお願いした。

企業の協力を得るために関連の商工会議所と商工会の協賛をもらい、参加人数が多い時は地区の警察に集会届けを出した。(東金市「御成街道保存会」の山内勲氏には大変お世話になった)。

第7回からは、タバコ吸殻を一般ゴミと別に記録することにした。7から20回の「御成街道ゴミ狩り駅伝」活動の主な記録は以下の通りです。

≪平均参加者:6.1人、合計距離:141km、収集したタバコ吸殻は4年間で総重量12.8kg(計量不可の第8回、14回を除く)≫

■貴重な長期・定期的な記録

毎回、地域・参加人数・距離・天候が違うため、数の比較は難しく、さらに回収ゴミには金属やガラス瓶・濡れた衣類などがあり、重量での比較検討も今後期待したいが、この種の定期的な長距離にわたるゴミ收拾記録は貴重なものであり、沿道住民、並びに行政への問題提起の目的は不十分ながら果たせていたと考えている。

年に1度だけの清掃活動で路上ごみが減る効果は、全体ではごく微々たるものと言える。

それは我々の活動を目にした沿道の人々も、行き交う自動車の人々も同様に感じたに違いない。

私達も同様に考えるが、それだからこそ「ポイ捨

てしないことの啓蒙効果がある」と考えてこのごみ拾い活動を続けていた。

残念ながらその効果のほどは良くは分からないが、私達にはこの問題をより深く考えるという意味で効果があった。

ところが2019年12月に始まった新型コロナ禍の影響で集団行動は休止となり、メールで報告しながら、各会員が各自の地元で吸い殻拾いを中心に活動を続けてきた。2023年になり、状況にやや改善が見られてきたので、秋からの再開を準備中である。そこで、この機会に家康とタバコについて情報を集めてみたところ興味深い話を目にしたので、2・3紹介したい。

■タバコの害を知っていた家康

東京大学特任教授・中川恵一氏によれば「家康は健康オタクでした。伝来したばかりのタバコを吸おうとしないばかりか、子の秀忠の代には禁煙令を出したくらいです。直感的にタバコの害に気付いていたのかもしれませんが」と述べている。

(日本経済新聞:2023.6.24.)

そこでJT(日本たばこ株)のHPを見ると、1601年にタバコを原料とする薬とタバコの種子が家康に献上され、その後タバコが広まったようで、1612年、1614年、1623年に禁煙令が、1690年には「江戸で歩きタバコの禁令」が出た。そして1760年に10代将軍になった徳川家治について「初めて喫煙した将軍」と説明がある。つまり徳川家では160年間は禁煙であったようだ。

江戸は当時のロンドン、パリに並ぶ大都市であって、特に上水道・下水道など生活衛生面で勝っていた(PHPオンライン衆知:2022.7.4.)。そしてもろもろの「江戸しぐさ」に見る如く、お互いに迷惑かけない、もめごとを起こさない生活であった。「喫煙所でも、吸わない人の前では吸わない」、「隣の三尺(掃除)」等々、お互いに暮らしやすくすることに庶民が努力していたのも、家康の知恵からといえよう。【なかくき・かずのり】

*7年間の回収ゴミには、ビン、缶、ペットボトル、メタル製品、プラスチック製品など含む。

*第1~20回(7年間)で参加者は延198名。回収ゴミ総重量は959kgでした。

*通常の行動計画のほかに、ゴミ搬送と緊急用の伴走車、収集ゴミの処分の手配が不可欠でした。

*主な調査参加者:NPO法人「もう一つのプロジェクト」:市川真也、木村拓也。「エコマインドの会」:吉田謙二、大前るみ、関川和。「タバコ問題を考える会・千葉」:辻丸卓美、紅谷歩、利根川豊子、中久木一乗、他。

*これより以前の千葉県内の路上の吸殻掃除活動については【禁煙ジャーナル:322号=2002年7-8月号参照】【禁煙ジャーナル:329号=2021年4月号参照】

父・渡辺文学を語る

渡辺 南人

今は昔、祖父・三樹男と父・文学はタバコも酒も大好きだった。当時は世田谷区桜丘に住家があり、3世代が暮らしていたのだが、家族そろっての夕飯時には、きまって二人がビールや日本酒などを飲みながら野球中継を見ていた。そして、選手のプレーを好き勝手に批評しながら、タバコの煙をくゆらせていた。



当時、小学生だった私には、煙たいとか健康に悪いとかの意識は別段なかったが、煙のせいなのか、自分の頭がいつも「ボンヤリ」の状態だったという記憶がある。また、ライターのがスが無くなると、決まって大騒ぎになったこともあり、子ども心にも喫煙が大人の生活の中では重要な事なのだと感じていた。

当時の男性の多くが喫煙者であり、職場、公共交通機関、さらには病院の待合室でさえ喫煙の規制はなかった。そして、歩きたばこも自由、吸い殻のポイ捨ても「当然」の時代。

世の中全体がのんびりしていて、みな寛容で小さな事に腹を立てたりしなかったし、健康の重要性も今ほど叫ばれていなかったように思う。

■禁煙に成功した父

父はまもなくして、禁煙を宣言した。火をつけずにタバコをそのまま1本口に加えて、泣きそうな顔をしていたのを何度か見た。ソワソワ落ち着かない様子で、ちょっと気の毒だと思ったが、自分に出来ることは「気に障ることはなるべく言わないことだ」と考え、それを毎日心がけた。

父は当時、反公害運動に専念し『環境破壊』という専門誌の編集・発行に関わっていたが、禁煙に成功したからだろうか、今度は「嫌煙権運動」にも加わった。

この運動はそれこそ「多士済々」、いろいろな職業の方、主婦、学生なども参加していた。特に伊佐山芳郎弁護士は、タバコ産業の社会悪を理路整然と説明、力強くタバコの悪を追及する姿が写っている新聞の写真や記事などを見て、世の中には頼もしい人がいるものだとつくづく感心した。

■クープ長官主催の会議に出席した父

私がアメリカのニュージャージー州に留学中、父が会いに来た。ワシントンで開催のタバコ問題に関わる国際会議に1人で参加、慣れない英語で

意見を交わしたり、当時の日本政府の方針や政策を糾弾するスピーチをしたり、会食に出席したりしたなどという話を聞き「大したモノだ」と感心した。大学の講義に出席しても、おとなしく座っているのがやっとな自分と比べて、その度胸や行動力には、私が言うのも憚られるが、正直舌を巻いた。

また当時、レーガン政権のもとで、公衆衛生局長官(サージャン・ジェネラル)を努めたC・エヴェレット・クープ氏が、父の英語を聴き「日本語より上手い」などと、ジョークを言っていたのを会議の録音を後から聴いて知ることとなった。

英語の上手い下手は人によって評価の仕方が違うので、私にとにかく言う筋合いは無いが、世界中から約100名の要人が集まる国際会議に出て英語のスピーチをするなどということは、当時の私には考えられない出来事であり、本当に驚いたという記憶がある。

一方、会議期間中の宿泊先のホテルでは、マサーチュウセッツ喫煙対策室長のG・コノリー博士と同室だったとのことで、数日後に私がたまたまコノリー氏と電話で話す機会があった。その時、氏が「お宅の親父さんはとても良い人物だ」と褒めてくださり、「嬉しい」よりも「こそばゆい気」がした。これもいい思い出である。

■マーク・レヴィン氏について

マーク・レヴィン氏は、1994年から96年にかけて北海道大学法学部の助教授をされ、1997年からハワイ大学法科大学院准教授として活躍された方だ。日本のタバコ問題に関心を寄せ、父とも交流、禁煙ジャーナルにも寄稿されていた。

そんなことから、私も日本人の秘書の方とは日本語で、マーク氏とは英語で話す機会が何回かあった。非常に親身になって対応して下さったことが忘れられない。日本が先進国でありながら、タバコ対策では著しく遅れている状態を海外に知ってもらふ役割を担われ、それが日本にとっては結果的には良かったように思う。

■おわりに

父は電話をすぐに切ってしまうし、いつも何か追いかけられているような感じを与えているし、そそっかしくてミスも多い。おまけに建前と本音の区別は苦手でバカ正直な面もある。だが、そんな父でも憎めない性格なのだろう。周りが助けてくださるのだ。

今回は、これまでに父と交流のあった外国人と話をする機会が私にもあったので、父が元気なうちにとその思い出を語ってみた。

読者・皆さまのご了承を賜りたいと思う。

【わたなべ・みなと＝北九州市在住／文学長男】

＜メディア・ウォッチング＞

■5/25『産経』（加納裕子記者）「受動喫煙防止 自室も制限」「明石の分譲マンション 規約検討」。明石市の分譲マンションが受動喫煙防止を義務付けるよう管理規約を改訂したという内容。喫煙に関する禁止事項について、旧管理規約は「エントランスホール、共用廊下、エレベーター内等で喫煙すること」となっていたが、新管理規約は「共用部分で喫煙すること」となっている。①規約改訂に賛同した住民の短大教授は「喫煙者にも、周囲に及ぼす影響を考慮してもらうきっかけになる」②「岡本光樹弁護士の見解」：ベランダ喫煙による近隣への受動喫煙を不法行為とする判例があるが、居室内で不法行為が認められた例はない。今回の改訂は、居室内での喫煙であっても受動喫煙被害を与えることを禁止する内容で「被害者側の説得力を増すものと期待できる」③管理規約細則の改訂を提案した大学講師の女性の苦悩④一日に何度もたばこの臭いが室内に漂い、喉や目が痛んだ⑤10代の長女も「肺に異物が入ったように息苦しくなり頭痛がした」⑥マンション管理士の田中義之氏は「バルコニーの禁煙が明記され、専有部分も含めた受動喫煙被害に踏み込んだものになった」■5/28『毎日』[みんなの広場日曜版]「難しい禁煙成功への道」。リード文：「31日は『世界禁煙デー』。なかなかやめられなかったたばこを断つまでの苦労や手段、きっかけなどを紹介します」。①記憶に残る黒いヤニ②「命」選んだ究極の二択③カートン買いで即効④成功は人生最大の手柄⑤若げの至り改めた言葉、が投稿文の見出し。このなかで、印象に残ったのは②で、医師の役割の重要性が分かる■5/31①『日経』「受動喫煙の対策強化『認知』3割」②『読売』「受動喫煙対策認知度35%」③『東京』「受動喫煙対策周知に課題」。世界禁煙デーのこの日、3紙が国立がん研究センターの調査結果を報じた。①「読売」は、喫煙可能店の標識を「見たことがない」と答えた割合を「喫煙者38%」「非喫煙者72%」と示し、喫煙者は「吸える場所を見つけようと、積極的に標識を探す傾向がある」②『日経』は、受動喫煙で不快な思いをした場所が「路上72.6%」だったことを「屋内の対策が進んだことで、相対的に不快に感じる機会が増えたとみられる」と解説③『東京』は、改正健康増進法に関するコメント「法施行から3年たつが、周知不十分で普及啓発に課題がある」を掲載。なお、WHOが世界禁煙デーのスローガン“Grow food, not tobacco”を加盟各国に示したことは完全黙殺でした(笑)■6/2『毎日』「正恩氏はニコチン依存」「韓国情報機関、国会で報告」。この記事で嗤えるのは“首領さま”がヘビースモーカーなのに、北朝鮮外務省が世界禁煙デーにあわせて「共和国政府は、人民の生命と健康を第一に置き、彼らが健康な体で国家と社会

の主人として役割を果たしながら、文化的生活を送れるよう禁煙政策を引き続き実施していく」と強調したこと■6/14『日刊ゲンダイ』「『世界禁煙デー記念イベント2023』開催」。ゲンダイにじりては珍しい“超優良”記事。厚労省の広報サポーターとして起用された栗山英樹氏と星野夢奈氏のコメント[栗山氏]→「コロナで医療従事者の皆さんも大変な思いをされてきたと思いますが、皆が健康でないと負担がかかってしまう。アンバサダー就任をきっかけに健康の大切さを皆さんにしっかりお伝えしていきたい」/[星野氏]→「今日学んだことを、広報サポーターとして多くの方にお伝えできるよう頑張っていきたい」■6/20『日刊ゲンダイ』「神田のビジネス街に誕生した投票型喫煙所が盛況」「設置企業は『街づくり』に向けた利用者の声に着目」。喫煙所ブランド「THE TOBACCO」を運営するコソドが5月1日に設置した喫煙所を取材。「環境美化と街づくりを見据えた投票型喫煙所」などと銘打っているが、所詮は喫煙人口の減少を阻止したいタバコ企業へのヨイシヨイ記事。本紙渡辺編集長は「喫煙所のない社会環境を整えていくことは、政府や自治体、メディアの役目ではないか」と何年も前から多方面に訴えてきた■6/11『河北新報』「仙台・勾当台公園」「吸い殻入れ1カ所に集約」「効果もやもや?」。仙台市は勾当台公園内の3カ所に点在していた吸い殻入れを1カ所に集約した、という内容。公園課の担当者は①吸い殻入れ集約に苦情は寄せられていない②受動喫煙対策として効果があるかどうか、まだ分からない、といった内容。そもそも「吸い殻入れ」を3カ所から1カ所に減らしても、自分で吸い殻入れを用意して、そこに収めればどこでも喫煙OKと言えるような“対策”だから「次の手」は全面禁煙しかありませんね！(笑)■6/22『毎日』「街に喫煙所設置加速」「千代田区14億円、大阪市19億円超投入」。①改正健康増進法の全面施行とともに都条例で従業員がいる飲食店が全面禁煙になり「居場所を失ったスモーカーの一部が屋外で一服」②取り締まりが追いついていないのではなく「規制の対象外となる私有地のコインパーキングなどでたばこを吸う」③区にはほぼ毎日「取り締まりだけを強化するなんてひどい」との声④「喫煙場所を設けなければ、規制が及ばない場所で吸う人が出てくる」⑤現在、81カ所の喫煙所を100カ所に増やす予定…といった千代田区の動向。⑥西武鉄道・所沢駅の喫煙所撤去で、周辺に吸い殻とゴミが倍増⑦大阪市では「民間企業の喫煙所閉鎖の影響」でポイ捨てが目立ってきた⑧他の自治体も「ゴミと吸い殻の解決策」として「一定数の喫煙所を設ける」⑨大阪市は2025年までに現在6カ所の屋外喫煙所を120カ所に増やす計画⑩自民、公明両党がまとめた2023年度の税制改正大綱は自治体に対し「駅前や商店街などで

野外分煙施設の整備を促す」④総務省も都道府県に、たばこ税を活用した屋外喫煙所の設置検討を通知し後押ししている⑤仙台市の勾当台公園内に喫煙所を設けるか否か住民の意見が割れている、といった内容。この記事のリード文では「たばこ離れが進んでいるのに、なぜスモーカーの居場所をつくるのか」と問いかけているにもかかわらず「たばこを吸う人と吸わない人は、どうすれば共存できるのか」と“共存”ありきの構成■6/28『東京』[すこやかゼミ]「加熱式たばこ それでも売れる」。リード文が分かりやすく、5行読むだけでも十分と言えるほど。①加熱式たばこが売れている②紙巻きたばこより害が少ないという証拠はなく禁煙にもつながらず③呼気中の有害物質による受動喫煙も懸念される④売れる背景には、政府の広告規制の緩さがある、という構成で最後まで読みたくなる記事。特に注目されるのは①2021年から医療関係者向けの新聞や情報サイトに加熱式の広告が出た②日本歯科新聞にはフィリップモリスによる広告①加熱式は歯の着色が少ないとする研究②「歯科領域で高まる加熱式たばこへの期待」として歯科医のコメントを紹介③国立がん研究センター・平野公康たばこ政策情報室長「歯科医が加熱式を評価しており、びっくりした④国際歯科連盟「安全性が証明されておらず、若者の喫煙開始にもつながるため、紙巻きの代替物として推奨すべきではない」との勧告⑤歯科医師会や歯周病学会は加熱式による歯や歯肉、全身への健康障害が懸念されるという見解を発表⑥口腔9学会脱タバコ社会委員会が「加熱式健康影響が少ないかどうかは明らかではない」「禁煙を阻害する可能性がある」との文書を発表。末尾は平野情報室長のコメント「罰則付きの法律で広告を禁止するのが世界標準。日本もそうすべきだ」■6/28『日経』「低価格路線JTの逆張り」「競合は500円台半ば多く 節約志向の受け皿に」。①2023年1～3月期の紙巻きたばこシェアはJTが48%、競合他社が52%となっているが「…5割に近づいた。市場占有率の拡大こそJTの柱となる戦略」とJT役員。2021年は2割に満たなかったものを引き上げ、さらに上を目指す戦略を紹介「中期的に低・中価格帯の紙巻きでシェア6割を達成したい」②JTの加熱式は出遅れ。①販売代金は2020年度の1兆639億円から2022年度に1兆4452億円に増加②2016年に「プルームテック」、2021年から「プルーム・エクス」を展開。シェアは1割程度③加熱式たばこのシェアトップはPMIで7割。PMIは紙巻きからの置き換えや、20～30代の需要も見込み、アイコスに資源を集中④加熱式のデバイス価格は数千円と高価だったが、JTは低価格路線。2022年11月には3980円だった「プルーム・エクス」の価格を1980円に引き下げ、2023年春にはさらに1000円割引のキャンペーン⑤たばこ市場に「局所的盛

り上がり」が見られる例として①水たばこは若い女性のファンが増加。店舗数も全国で1000店舗超②BATは「オーラルたばこ」を販売③JTは国内で値下げしても海外では値上げ。英国では2022年から2023年にかけて3回値上げ、といった内容■6/28『しんぶん赤旗』。「世界禁煙デー」「コロナ禍タバコ対策振り返る」「重症化リスク避けるには紙巻きも加熱式もやめること」。5/27にタバコ問題首都圏協議会が記念イベント開催。大阪国際がんセンターの田淵貴大医師は、コロナ禍のタバコ対策を振り返り、加熱式たばこをめぐる最新情報を紹介。①コロナ時代の反省点①タバコを吸えば、ニコチンによって免疫機能が低下することは分かっていた②感染や死亡、重症化のリスクも有意に高くなる③「重症化を減らすために禁煙を」と伝えていたらよかった②「新型コロナウイルス感染症 診療の手引き」①第4版(2020年12月4日)では「重症化のリスク因子かは知見が揃っていないが要注意な基礎疾患等」として扱われていた②喫煙が「重症化のリスク因子」になるのは、3週間後の2020年12月25日発行「第4・1版」。「リスク因子」の根拠となる論文が公表されてから8か月も経過していた③喫煙者がなりやすい病気の死亡リスクは、高齢者のリスクに匹敵。「高齢者を若返らせることはできないが、喫煙者は禁煙で死亡リスクを減らすことができる」④1日20本吸う人が心筋梗塞などになるリスクは、非喫煙者の約1.8倍①本数を4分の1に減らしても、リスクは1.5倍にしか下がらない②有害物質の量が減ってもリスクが減らないのは「致死量の毒は量を増やそうが減らそうが、飲むと死んでしまうのと同じ⑤加熱式たばこは、成人日本人の10%以上が使用①PM製のアイコスは世界シェアの半分以上を日本が占める②日本は加熱式たばこの実験場③加熱式でもニコチン依存症は起きる④加熱式たばこによる受動喫煙問題①1日0.2本の喫煙に相当する受動喫煙で、有意にリスクが増える②ほとんど毎日暴露されている人は、2017年の3.6%から2020年には0.2%にも③加熱式の出現でたばこ対策が難しくなっている。④禁煙目的の加熱式使用①紙巻きが吸えない場所でも、加熱式なら吸えることもあり、依存症が維持されやすい②紙巻きの禁煙に逆効果③2018年ごろの宣伝パンフレットの文言①IQOSにリスクがないというわけではない②健康リスクを軽減させる一番の方法は、紙巻きもIQOSも両方やめること、という文言は「やめたほうが良いと言っているのに、吸っているのだから、訴えないでくださいよ」と読める、といった内容■7/4『読売』(投書)「ポイ捨て理解できぬ」。自宅前の吸い殻を片付けている投書者が、①先輩が車の窓から灰皿の吸い殻を投げ出していた昔の光景②富士山のゴミ問題を紹介し、誰もが「クリーンな精神」を持ってほしい、と主張。【氷飽健一郎】

展望台

◆8月5日はタクシーの日。日本初のタクシー営業が1912年のこの日に始まったことから、1989年に全国乗用自動車連合会（現：全国ハイヤー・タクシー連合会）が制定した◆私の祖父はタクシーの運転手だった。大変なヘビースモーカーで、咳き込みながら喫煙していた。運転手は酒が飲めないの、タバコを嗜むことにしたそうだ。酒とタバコのどちらか、或いは両方の選択が必須ではないはずだが、当時の人達は「タバコは大人の嗜み」と信じていた◆祖父は60代で他界した。大腸癌だった。肺癌ではなかったことが親族には意外だった。何十年も過ぎてから、私は「喫煙者は非喫煙者に比べて大腸癌になりやすい」ことを知った◆個人タクシー運転手の安井幸一さんが東京で日本初の禁煙タクシーを走らせたのは1988年。法人としては東京の大森タクシーが2000年に走らせた。官城県タクシー協会が全面禁煙にしたのは2009年。先駆者たちのご活躍のおかげで、喫煙タクシーは姿を消したが、運転手の喫煙率は他業界ほど減っていないのではないかと。降車して喫煙する姿を度々見かける◆因みに全個協の資料によれば、個人タクシー事業者に多い死亡廃業理由（令和元～3年・死亡廃業580件のうち原因不明を除く）は、1位が肺癌、2位は肺炎、3位は心不全、4位はCOVID-19、5位は肝硬変・肝不全とのこと。全てがタバコが原因ではないかもしれないが、この世にタバコが無かったら、まだまだ元気に働けた運転手も大勢いたことだろう。「喫煙は予防できる単一で最大の病気の原因」なのだから、未だに喫煙を続けている人には今すぐ禁煙して欲しい◆話は変わるが。4月に母が亡くなった。本人も家族も非喫煙者だと聞いて、医師は首を捻っていたそうだが、高齢のため、詳しい検査は行わなかった。母が若い頃、紫煙立ち込めるタクシー事務所で仕事を手伝っていたという話が脳裏を

かすめた◆そして6月。『北海道禁煙フォーラム』で、松崎道幸先生の『受動喫煙：最新の話』を受講した。その中に「若い頃の受動喫煙により、30年後に病気が増えることもある」というお話があった。フラミンガムスタディの、18歳までの親の喫煙状態が明らかかな子どもを対象とした平均30年間の追跡調査によると、子どものころに家庭で受動喫煙があると、大人になってから認知症と脳卒中が2～3倍に増えていたそうだ。やはり母が患った数々の病気も、幼少期からの受動喫煙が関係していたのではないだろうか◆能動喫煙の害が言われて60年、受動喫煙被害が30年、3次受動喫煙被害が10年。タバコの害の全てが明らかになるまで、これから先も大勢の被害者を出し続けなければならないのか。死んだ人は帰らない。祖父を恨むわけにもいかない◆この先、どれだけエビデンスが出たとしても、タバコ産業は「まだ証明されていない」と嘘を言い続けることだろう。もうタバコは禁止されるべきである。【齊藤 由美】



【雑記帳】 6月20日から、郷里の南会津町に。広い庭は雑草が生い茂っており、連日草刈り機を肩に汗を流してきました。びっくりグミは完熟を過ぎていて残念でした◆6月22日毎日新聞が「街に喫煙所 設置加速」と題して、千代田区が14億円、大阪市が19億円を投じて喫煙所を設営する動きを報じました。問題は自民・公明両党の税制大綱と総務省も喫煙所の設置を通知していることです。多くの喫煙者が内心「やめたい」と悩みながら吸い続けることで「喫煙所設置」は逆効果ということを力説しているのですが、メディアも全く無視しているのが残念です◆京都の水族館で鯉や金魚が大量死した原因はタバコだったこと、また新橋のビルの爆発も、タバコに火をつけようとした瞬間に起きたことが判明、社会問題となっています。タバコ会社は、この事件をどう受け止めているのでしょうか◆7

月14日、横浜市歴史博物館で「中田喜直生誕百年特別展」に招かれました。中田先生の生い立ちから、戦争体験、数多くの名曲を残された楽譜の展示など、よくこれまでの資料が、と驚きでした。先生と共編著の『嫌煙の時代』や、『禁煙ジャーナル』（中田先生追悼号）も展示され、また記念誌には私の寄稿が掲載され、平山雄博士、伊佐山芳郎弁護士と六本木の「本むら庵」で撮った写真も掲載されました。この日、幸子夫人も参加され、写真を撮って頂き、Facebookで、当日の様子を紹介させて頂きました。今回の件では、同館の小林紀子氏にいろいろとお世話になりました。厚く御礼申し上げます。（文）